

叛

小說李自成

旗

上

姚雪垠 著
陳舜臣·陳謙臣

上

姚雪垠 著

陳舜臣・陳謙臣 訳

叛

小説 李自成

旗

講談社

〈訳者略歴〉

陳舜臣（ちんしゅんしん）

1924年兵庫県生まれ。

大阪外国語大学卒業。小説家。

主著書『阿片戦争』『太平天国』『新西遊記』（講談社）

陳謙臣（ちんけんしん）

昭和12年兵庫県生まれ。

東京教育大学卒業。翻訳家。

著者『中国語と日本語』（共著・祥伝社）

叛旗—小説李自成—(上)

1982年10月20日 第1刷発行

定 価 1800円

著 者 姚 雪垠

訳 者 陳舜臣／陳謙臣

発行者 三木 章

発行所 株式会社講談社 東京都文京区音羽2丁目12-21

郵便番号 112

電 話 東京(03)945-1111（大代表）

振 替 東京8-3930

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 藤沢製本株式会社



© 陳舜臣 陳謙臣 1982. Printed in Japan.

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。

送料小社負担にてお取替えます。

ISBN4-06-200266-3(0) (翻)

『叛旗』と李自成のこと

司馬遼太郎

中国史においては、天は意志をもつものとされる。王朝の成立は、天が君主に命をくだし、民の統治を付託したとすることによって哲学化され、権威づけられる。この点、強烈な保守性をもつ。

しかしながら、歴世、大陸を統一した王朝は数百年を寿命として衰弱し、統治能力をうしない、倒される。倒す側もまた天命をうけたとする。君主天授の哲学的な原理は、現王朝の存続も天命であると同時に、これに反抗することもある——ただし成功すればのことだが——天命であるという両面性をもっている。でなければ、この巨大な大陸に統一をもたらす権力など望むべくもなく、ながい歴史が内蔵する智慧のなから、この共有の思想が生まれたのであろう。

明末、延安府の荒涼とした山河にうまれた李自成（？一六四五）は、ようやく駅卒の職にありつき、次いでその職をうしなつた。流民になり、やがて一団の首領から変転をへて相当な規模の流民軍をひきいる勢力のぬしになった。

王朝の統一能力の衰弱期には、官吏が腐敗して私的に税をとりたてると可斂誅求によって流民がふえ、さらに飢饉などの要素がくかわると、たちまち四方に浪民団ができ、私軍として食糧の豊富な地方へ流れてゆく。かれらが首領にかつぎあげる人間こそ、中国の概念でいう英雄である。流民が英雄に期待するところは食わせてもらおうということであり、言いかえれば流民に食わせる能力をもたない者は英雄ではない。この点、日本史の「英雄」の概念とは異なるだけでなく、極端に言えば日本史は

社会史的な素地として英雄を成立させない、といっている。

流民団の首領は、穀倉地を狙って動く。李自成の時期、これらの首領がむらがり出た。名も、芸名やしこ名にちかく、閻魔大王にあやかって閻正虎と称する者もあれば、上天帝といういさましい名を称したり、過天星と称する者もいた。かれらはそれぞれ穀物の多い地を奪取し、かかえて食わせる流民の数を多くした。

闖王という者もいた。闖というのはあばれ馬が門扉を蹴とばして飛び出るさまをいうのだが、王を自称することはともかく、わざわざ闖という文字を冠するなど、当時の流民の首領の気分や気概、荒っぽさがどういふものであったかが察せられる。李自成は早くからこの闖王の配下になっていたが、闖王が官軍に捕殺されるとその跡目を継いで二代目の闖王となり、物成りのいい四川に入ってここに割拠した。

四川に割拠したころから、李自成は変った。それまでは戦上手の乱暴者といった印象があったのに、知識人の李巖や牛金星などがその幕営に投じてくることによって、その進言を入れ、軍律をきびしくし、掠奪強姦をする者は死罪とした。また、土地をうしなつた農民に対し、平等に田を与えると布告し、歓迎された。さらには三年の税を免じた。李自成は天命を待つようになったのである。

こういう場合、遠いむかしから、「風を望む」という現象がおこる。四方のひとつが、李自成の人物とそのやりかたを慕ってやってくるのである。

たちまち大勢力をなし、ついに陝西に入つて西安（長安）をおとし、国号を大順と称し、およその官制をたて、大順王となった。

さらに膨張して華北へ攻め入り、うそのようなあつけなさで明都北京を陥とし、崇禎帝を自殺させ、二百七十七年の王朝の寿命を断つた。

一方、いまの中国東北地方は長城の外であり、異民族地帯であった。ここで満洲ツングース語族である女真人^{じょしん}がみずからの民族を満洲と称し、やがてその地を満洲とよび、ヌルハチとその子孫が同民族を統一して後金という異民族国家をたて、のち清^{しん}とあらためた。清軍はすでに長城の関門である山海関^{かいかん}のむこう側に充満していた。

明はその最後の段階では北京城の守備軍をもたず、その精銳である呉三桂^{ごさんけい}（一六一二―七八）將軍の軍は山海関の内側を防衛した。陣中、呉三桂は北京の陥落と皇帝の死を知り、敵の清軍と協同して李自成を討つべく（と、呉三桂から清の摂政王ドルゴンに送った密書にある）山海関の門をひらいた。中国史では、これを清の「入関」という。漢民族の国を異民族に手わたした呉三桂の真意やそれにかかわる諸事情がどういうものであったかについては、さまざまな通説があるが、その真実と、こういう場合の人間の劇的な心情と行動については、この『叛旗』によって感じかつ知るべきであらう。

著者の姚雪垠^{ようせつぎん}氏は、中国の代表的な歴史文学のにない手である。

一昨々年の七九年五月に、大阪東郊の拙宅を訪ねてくださって、当時、すでに中国の読書界の話題の中心だった『李自成』四巻を頂戴する幸運を得た。

大きな印象的な目と、ぶのあつい容貌をもったこのひとに、李自成についていくつか質問した。とくに、呉三桂の愛人で、蘇州^{そしゅう}の名妓だった陳円々^{ちんえんえん}についてきいた。

姚雪垠氏のそのときの談話を、うろおぼえのままここで紹介するのは憚^{はば}られるし、かつ読者にとつてのせつかくの楽しみを殺ぐおそれもある。ただ、聴くうちに胸にさまざまな情景が明滅し、そのあと、蘇州の円々の旧跡を訪ねたり、『蘇州画舫録^{そしゅうがふろく}』（岩城秀夫訳。平凡社東洋文庫）によって当時の遊

妓の気分を感じようとしたほどだった。

李自成は、日本では知られるところが薄い人物だが、しかし徳川幕府は、巷説ながらも、李自成の人物と、かれがひきおこした事態を、大づかみにつかんでいた。

長崎港には、多くの中国船が来る。入港するたびに、中国におけるさまざまな風説を長崎唐通辞が取材し、それを和文にして江戸の幕閣に送るのが慣習になっていた。

とくに明・清交代の時期のものを集録したのが『華夷変態』である。題の意味はいろいろ解釈があるが、私は素直に華（漢民族王朝である明）が夷（満洲王朝である清）に態を変じた、という意味に解している。

李自成については、

「一揆之大将」

と表現しているがら——つまり幕府のきらう一揆の大將であるのに——窮民に対しじつに仁慈のあつた人物である、ときわめて好意的に書かれているのは、長崎唐通辞に語った船頭、商人、水主といった語り手たちが、当時、すでに亡かった李自成に好意をもっていたといえる。

一揆之大將李自成と申者、生国は陝西之内延安府の者、祖父は兵部尚書之官職にて（註・父は農民だった。祖父もそうだったろう）父は李自成幼少の時分に相果申候。此李自成、廿八歳之時分は、崇禎七年に而御座候。其年飢饉にて、万民百姓等、年貢上納仕候儀、不罷成候。因夫延安府朱脂（註・米脂）県之奉行所より、百姓共を捕へ、迷惑に申付候処に、李自成慈悲をたれ、右之百姓之

年貢の銀子にて上納仕候。

李自成が百姓たちの年貢を代って納めてやった、という。真偽はともかく、民間ですでに説話化された李自成の像がこのように好漢だったことのほうが、歴史の重要な要素である当時の社会の共通の感情をうかがう上で大切かと思える。

姚雪垠氏の来訪をうけたとき、私は『華夷変態』をもっていなかったため、右の「風説」を話題にすることができず、いまでも残念におもっている。

当時の拙宅には粗末な鉄柵の門があつて、入居以来、あけたことがなく、錆が赤く浮き出ていた。姚氏らが来てくださるというので、蝶番の錆を槌でたたいて何とか開けた。雑談のなかでそのことをいうと、姚氏はたちどころにボール・ペンをとって、ありあわせの紙片に、

花径不曾縁客掃（花径曾て客に縁りて掃わす）

蓬門今始為君開（蓬門今始めて君が為に開く）

と、書きつけた。この詩が、杜甫が成都郊外の草堂にあったときの詩「客至」のなかの句であることを、私はしばらく気づかなかつた。

姚氏がどういう風韻の人であるか、このことによってわずかに察してもらいたい。

監訳者序文

陳 舜臣

幕末や戦国が、日本の歴史小説の宝庫であるように、中国でも王朝末期の動乱は、作家の創作意欲をかきたてるものをもっている。本書の原題は『李自成』であり、明王朝崩壊の前夜を背景に、王朝の滅亡を反乱に起ちあがった側から描いたものである。

本書の第一巻が中国で出版されたのは一九六三年のことで、空前のベスト・セラーとなり、いまなお広く読まれている。文革の一時期、この作品も批判を受けて禁書となったが、それでも人びとはこの浩瀚な小説を手写して、ひそかにまわし読みをしたといわれる。

この作品のなにか、中国の多くの読者を魅了したのであるか？ いくつかの理由が考えられるが、まず第一に中国人にとって明末動乱はよく知られた歴史であり、詩人呉偉業の長詩『円円曲』えんえんきょくによってすでに文学化されてもいて、李自成は知名度の高い史上の人物であることが挙げられる。

ただ日本の読者にはなじみが薄いはずなので、かんたんに教科書ふうの解説をしてみようとおもう。李自成の反乱は、日本では大坂の陣が終わり、徳川幕府体制がようやく固まりかけた、三代将軍徳川家光の時代に相当する。李自成が没落して死んだのは、劍豪宮本武蔵の死と同年とおもわれるといえ、日本の読者にわかりやすいだろう。李自成の時代のすぐあとに、日本人にもなじみの深い国姓爺こくせんや鄭成功ていせいこうが活躍する時代がつづくのだ。

反乱を呼びおこすのは悪政である。明末は政治がみだれ、腐敗し、人民は搾取に苦しんでいた。明

末の政府は財政難に悩み、それが人民に搬寄せされたために、各地に反政府蜂起がおこった。明の財政難については、いささか日本とのつながりがあるようにおもふ。

日本で文禄・慶長の役と呼ばれる豊臣秀吉の朝鮮出兵によって、明は朝鮮に援軍を送らざるをえなかった。ときの明の皇帝神宗（万曆帝）は有名な客裔家であったが、朝鮮とのあいだに安保条約のごときものがあつたので、やむをえず出兵したのであらう。このときの軍費が、明の財政を圧迫した。明の財政難はなにも朝鮮救援だけによるものではないが、かなり大きな要因となつたはずだ。

明は財政難解決のために、駅站制度を廃止した。日本でいえば東海道五十三次の宿場に、宿場役人を置いて政府が管理していたのを、ばつさりと切ったことになる。李自成は西安の駅夫、すなわち宿場の人足であつた。駅站制度の廃止によって、彼はおおぜいの仲間とともに失業したのだった。駅站は全国に網の目のようにひろがり、たがいに連絡がある。荷物や郵便をはこぶ道中の安全のため、互助組織をもっていた。李自成の反乱が、それまでの中国の農民蜂起とちがって、はじめから組織らしいものの上に立っていたのは、このような歴史的な背景がある。

豊臣秀吉と李自成を結びつけるのは、けつして牽強付会ではないとおもう。李自成の挙兵は、秀吉の朝鮮出兵終了の三十三年後にあつてゐる。本書には秀吉の名は登場しない。けれども、私は日本の読者に、東アジアの歴史が想像以上に敏感に連動していることを、念頭において本書を読んでいただきたいとおもう。

つぎに中国の読者が本書にひきつけられたのは、強い組織をもつた李自成の反乱が最終的には失敗したが、その理由はどこにあつたかを知りたかつたからであるとおもう。そこから歴史の教訓を学ぼうとする、強い願望がかんじられる。これは現代の中国が組織力によって政權をたてたが、孫文の遺囑の「革命いまだ成功せず」がまだ生きているという意識が、人びとのあいだに強烈に存在すること

を物語っている。

理屈っぽいことを書いたが、なによりも読んでおもしろいということが、本書をベスト・セラーにした最大の理由であるとおもう。五・四運動（一九一九）で新しい文学がおこって以来、中国で本格的な長篇歴史小説が書かれたのは本書がはじめてである。魯迅、郭沫若、林語堂たちが、歴史をテーマにした文章を書いているが、短篇、戯曲、評伝のたぐいであつた。本書の登場は、これまでの武俠小説（日本でいう講談本）にあきたりなくなつた、中国の読者層の向上を反映する面もあるだろう。

原作者の姚雪垠氏は一九一〇年の生まれで、河南省鄧県出身である。学校は小学校三年と初級中学を一学期だけ学んだという。独学で河南大学の予科にはいったが、学生運動で逮捕投獄され、退学処分を受けた。処女作は一九三八年に書かれた短篇小説『差半車麦秸』で、これは農民遊撃隊員を主人公にしたものだった。処女作時代からの氏の特長は、いきいきとした群衆のことばを、小説のうえに躍動させるところにある。一九四六年の『長夜』は破産した農村から闘争の路にはいる農民の群像をえがいているが、一九二〇年代の河南の土匪と呼ばれる集団の生活が、ことこまかに描写されている。あまりくわしすぎるので、北京で姚氏に会ってきたところ、「子供のころ、さらわれて土匪のなかで生活したことがある」という答であつた。

本書で訳者を悩ましたのは、李自成が活躍した河南地方の方言がしきりに出てくることだった。なかには、河南の人にきいてもわからないことばがあつた。そうしたものはリストをつくって、中国へ行ったとき、原作者の姚氏にじかにたずねた。「わからないはずだよ、土匪のことばだから」と、姚氏は愉快そうに笑って解説してくださつた。

『李自成』は超大河小説で、姚氏はまだ書きつづけておられる。全五巻で三百万字の予定であるときいた。四百字詰の原稿用紙にして七千五百枚だが、中国文のそれは日本語にすれば一万枚をはるかに

こえるはずである。

一九七九年、姚氏は中国作家協会の代表団の一員として来日されたことがある。おなじ団の文芸評論家の馮牧氏（ひょうぼく）が我が家を訪問されて、いろんなことを語り合ったが、そのとき、姚氏の『李自成』はその第一巻だけで、完結した小説となっている、という馮氏の評言をきいた。本書訳出の種（た）は、このときの馮氏のことばであるといつてよい。

全文の訳出は陳謙臣（ちんけんしん）がこれにあたった。できるだけ原文に忠実に訳している。私があとで訳文を検討したが、原文に忠実すぎて、日本語としての流れに影響があるとおもわれたところも、あえて大きな修正を加えなかった。この小説の魅力は、あきらけい豪放な怒濤であり、さらさら流れるおだやかな小川のそれではないとおもったからである。

原文には長文の序がついているが、原作者もその訳出は望んでいない。それは文革期に浴びたこの小説への批判にたいする、姚氏の戦闘的な反論である。たとえば、農民革命の李自成は文革期では神聖不可侵の人物とされたが、姚氏は皇権思想など迷信ももった、血の通った人間として描いたため、そのことでも批判を受けた。姚氏は批判にたいして、一つずつ反論を加えた。私などにはそれが面白いのだが、一般読者の興味の外にあることであろう。

古稀をすぎても姚氏はいまなお午前四時に起床し、一時間もジョギングをしてから執筆するという戦闘的な生活をつづけておられる。最近いただいた手紙では、武漢でシンポジウムを主宰したあと、すぐに大連に飛ぶといった多忙な日を送っておられるようだ。『李自成』が完成すれば、つぎは太平天国をテーマにして書く予定で、題は『天京悲歌』にきまっているという。太平天国のつぎは辛亥革命を書かれるそうだが、姚氏の健康と長寿を祈ってやまない。

上卷目次

『叛旗』と李自成のこと

監訳者 序文

主要登場人物一覧

第一章 帝の憂い

第二章 城下の盟

第三章 忠臣の涙

第四章 李自成

第五章 官兵雲集

第六章 決断

司馬遼太郎

陳舜臣

1 6 14 17 32 50 70 91 106

	第七章	北進
	第八章	潼関南原の戦
	第九章	智謀戦
	第十章	激戦
	第十一章	天網
	第十二章	包囲突破
	第十三章	商洛山
	第十四章	練兵
	第十五章	離脱
	第十六章	谷城
	第十七章	帝王の相
注		
付録		

裝画 平山郁夫
題字 陳舜臣

叛旗

——小說李自成

主要登場人物一覽

（關營側（李自成軍））

李自成

本名は李鴻基。陝西延安府米脂県の農民。明末農民蜂起軍關營の首領（關王）。智勇にと

劉宗敏

み、沈着で組織力と統率力がある。字は捷軒。關營中では総哨劉爺とよばれ、

高桂英

自戒の片腕であり勇猛な主将である。李自戒の妻（初代關王の高迎祥の姪）。女流

高一功

ながら沈着聡明で夫を陰に陽にたすける。女流本名は高国勲（高桂英の弟）。關營の総管兼

李過

中軍主将。寡黙な猛将。字は補之（自戒の甥）。一隻虎という綽号をもつ思慮ぶかい部将。

田見秀

字は玉峰。長者の風格をもつ關營の部将。仏教に関心をもつ。

尚炯

字は子明。關營中では老神仙とよばれている外科の名医。

郝搖旗

本名は郝大勇。高關王の旧部下でのちに李自成軍に編属された武将。直情径行の性格をも

牛啓東

つ。字は金星。地方権力者に欺かれた拳人（科擧の郷試合格者）くずれの経綸にとむ知識人。

高迎祥

李自戒に投じ天下取りの参謀となる。字は如岳。初代關王。高桂英のおじに当る。（官軍に殺害されている。）

袁宗第

字は漢舉。やや思慮に欠ける關軍の部将。字は明遠。關營の有能な若い大将。

劉芳亮

字は明遠。關營の有能な若い大将。綽号は二虎。關營の副将。

吳汝義

字は子宜。關營の中軍。本名は馬重喜。商洛の土賊の頭目。李過と義

黒虎星

兄弟の契りを結ぶ。のちに關營に加わる。綽号は黒虎星。

宋猷策

牛啓東が李自戒に軍師として推薦する。關軍の将校。官軍の副将賀人龍のいとこ。潼

賀金龍

關南原で戦死する。關營の老兵。純朴で冗談ずき。

王長順

關營の親兵頭目。李自戒の親兵。

李友

劉宗敏の親兵。關營の副将。

張材

高桂英の親兵頭目。李自戒の養子。十七歳の勇敢な将校。

李双喜

李自戒の養子同然のあつかいをうける孤児の張熊